

## 経験しないとできないこと

総合管理学部 3年 陽 圭太郎



インターン最終日（2023年9月25日）にCJCCのスタッフの皆さんとの集合写真  
中央で修了証明書を開いているのが自分です。

帰国してからまもなく1か月が経とうとしています。カンボジアはまだ暑いのでしょうか？上の写真のCJCC（Cambodia-Japan Cooperation Center：カンボジア日本人材開発センター）のスタッフの皆さんが懐かしくなりました。私は本学のもやいすとグローバルの一環で8月29日から9月27日までカンボジアに行ってきました。このプログラムは約1か月、海外の民間企業や政府機関でインターンシップをするものです。

今回なぜこのインターンに参加したかという、「大学生の間、1度は海外に行きたい」ただそれだけの理由です。私には海外経験が豊富な親戚がおり、幼い頃から海外の話が親戚からたくさん聞き、「海外ってどんなところだろう？」「海外と日本は何が違うんだろう？」徐々に海外に行きたい思いが強くなりました。今まで1度も海外に行ったことがなく、大学入学後も先輩や友達の海外経験をたくさん聞いて、ずっと海外に行きたいという憧れを抱いていました。社会人になったら仕事で忙しくなり休む暇さえなくなるので、まだまだ学生のうちに海外に行ってみたいと思うようになりました。しかし、普段の授業やアルバイトなどが忙しくて、一時期は海外を諦めていた時期がありました。でも「夢はあきらめたくない」その思い一筋で方法を探していたところこのプログラムを見つけました。3年になって就活が始まり、ちょっとリス

クがあると感じましたが、「経験より勝るものなし」と割り切って応募しました。このインターンに参加する前、私は10社以上のインターンを受けてきましたが、どれも似たような内容のプログラムで正直大満足と感じませんでした。厳しい就活を成功するために人と何か違う行動をしたいと考えていたら、この海外インターンを見つけ「これだ!」と思い、迷わず応募しました。

家族やゼミの先生の了承を得て、いよいよ出発の日を迎えました。出発前、友達から沢山の応援メッセージをもらって少し泣きそうになりました。長い長いフライトを経て、カンボジアに到着しました。何もかもが初めてで毎日が新鮮でした。首都のプノンペンなのにも関わらず、いたるところにごみが散らかっていたり、バイクの音がうるさかったりなど、イライラする部分もありましたが、今思えば良い思い出です。

今回のインターンで一番心配していたのが食事です。クメール料理はすっぱいものが多いと聞き、ちゃんと食べられるのかと不安でしたが、首都のプノンペンには世界各国の料理がありました。中華、和食、ハンバーガー、ピザなど様々な料理がありました。予想よりたくさん食べられて安心しました。クメール料理も食べました。肉系の料理が多く、個人的に好きなものが沢山ありましたが、たまに添えられていた甘酸っぱいソースが苦手で、いつも避けていました。個人的に一番印象に残ったクメール料理はロックラックです。これは日本でいう焼き肉定食みたいなもので、カンボジアに着いて初めて食べたクメール料理でした。味は日本でいう醤油ベースで、付け合わせのライムと胡椒をかけて食べるともっと美味しくなりました。ぜひ読者の皆さんにも本場のロックラックを食べてほしいです。



ロックラック (CJCCの中のカフェテリアにて)

さて、今回のメインはインターンです。私は CJCC でお世話になることが決まりました。この機関はカンボジア政府と日本政府がお互い資金を出し合って建てられたもので、政府が関係する機関です。カンボジア国内における雇用創出・起業促進、日本・カンボジア間の文化交流促進、日本語教育の推進が CJCC の業務内容です。私は日本語の資料を英語に翻訳したり、イベントや公式の Facebook 用の「日本クイズ」を作成したり、イベントの企画や運営の手伝いをしたりしました。中でも大変だったのが「日本クイズ」の作成です。合計で 50 問近く作りしました。今まで使ったことがないソフトで作りましたが、1 度使うとすらすらできました。50 問を作成したので、これから長期にわたってカンボジアの皆さんに楽しんでもらえると思うと嬉しいです。

私は今回のインターンで「カンボジア人の海外に行きたい意欲が日本人より凄いい」ということを学びました。私はある日、職場でカンボジアで行われた日本語検定の結果表を整理していました。およそ 500 人もの結果表を整理するのは大変興味深いものでした。しかし、一人一人の結果を見るとギリギリ合格、あと少しのところまで不合格の人がとても多かったです。一緒に作業した現地の同僚に「受験生のみんな日本語の勉強頑張っているようですね。日本人でも日本語は難しいと感じることがあるのに」と伝えました。するとその同僚は「みんな日本が好きなんだ。僕らカンボジア人は貧しい人が多いから海外の国で学んだことをカンボジアで活かしてこの国をもっと良くしたいと思う人が多いのさ。カンボジアだけではないよ。ASEAN の国々のみんなは日本のような海外へ憧れを抱く人は多いよ」と語りました。同僚の言葉を不思議に思い、その夜、私は海外へ留学・インターンで行く日本人学生と日本に留学してくる ASEAN 出身の学生の数を調べてみました。すると、私と同年代の海外渡航する日本人学生の人数は 10,799 人に対し、カンボジアやタイなどの ASEAN 出身の学生で日本に留学してくる人数は 50,489 人でした（2022 年データ）。私のような海外志向の学生はここ最近増えていることを出発前に聞いたのに、それでもまだ差があることにショックを受けました。さらに別の日、去年の夏休みに富山でホームステイをしたカンボジア人学生 3 人のインタビュー録を読む機会がありました。3 人とも日本への愛、海外生活を経験することの素晴らしさなど沢山語っていました。同僚が語った言葉、3 人の学生のインタビューなどから私は「日本人は海外渡航への意欲が少ない」と感じました。もし私が CJCC などの海外と日本を繋ぐ機関で仕事をしたら、日本の高校生や大学生に「海外経験の素晴らしさ」「海外を好きになってもらうきっかけ」を話したいです。改めて、カンボジア人の海外渡航への意欲はとても素晴らしく、いつか日本もカンボジアのようになったら素晴らしいなと感じました。

今回のインターンは僕の学生生活の中で 1 番価値がある経験になりました。私は出発前、このインターンで何か CJCC に貢献したいと思っていました。でもインターン初日に訪問した JICA カンボジア事務所の安蔵さんがこんなことをおっしゃっていました。「1 か月で人は何も変わらないし、貢献なんかなおさらできない。今回のインターンは経験を得るという気持ちで楽しくやってほしい」。すごく衝撃をうけました。出発前、私はこのインターンでカンボジアの発展に少しでも貢献したいと思っていました。せっかくこういう心構えをしたのにこれじゃ台無しだ

と最初は感じました。でも、安蔵さんが最後に仰った「楽しく」という言葉を思い出し、確かに物事楽しくやらなきゃと納得し、考えを素早くスイッチしました。このインターンを通じて生まれた最終結論は「経験より勝るものなし」です。ずっと行ってみたかった海外、何もかもが初めての体験、本当に楽しかったです。これからは経験を重視して長い人生をすごそうと決めました。後輩たちにも私が感じた思いが伝われば幸いです。

改めてこのインターンに行かせてくれた先生や家族、友達と CJCC の皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。またカンボジアに行きたいです。今後も何らかの形でカンボジアに関わりを持ち続けたいと思います。



アンコールワット 2023年9月2日